

「ドライブ・トゥ・ヘル」

—2 稿—

2025/8/23

雨森 れに

〈人物表〉

前上まえがみ
耀大あきひろ

(23) 建築業の職人。車で走るのが趣味

加藤かとう
則文のりふみ

(67) タクシー運転手

加藤かとう
真貴子まきこ

(67) 則文の妻

加藤かとう
昇利しょうり

(20) 則文の息子。耀大の後輩で走り仲間

依田よだ
准じゅん

(20) 死体。昇利の彼女

1. 山（夜）

道路の照明が差し込む山の中。

隠れるように道路の様子を伺う加藤真貴子（67）。

その隣には加藤昇利（20）。震えながら、依田准

（20）の死体を抱えている。

昇利 「准ちゃん、ごめん。ごめん……」

真貴子 「（昇利の口を押さえ）しっ」

微かに響く、車の走行音。

真貴子と昇利、依田を道路に押し出す。

2. 燿大の車・内（夜）

前上燿大（23）道路脇を見る。シカ標識がある。

視線を正面に戻す。

黒い影が飛び出してくる。衝突音。

燿大の呼吸は荒い。

シートベルトを外し、身を乗り出す。

フロントガラス越しに道路をのぞき込んでいる。

3. 山沿いの道路（夜）

車のバンパー、ボンネットが凹んでいる。

車の正面には依田が転がっている。

燿大が車から降りてくる。

燿大 「あの！ 大丈夫ですか！」

依田の反応はない。

燿大は依田の喉に手を当てる。

焦った顔をし、依田の口元に耳を近づける。

そして、よろけるように離れる。

車体に寄りかかり、両手で顔をこする。まるで悪夢

を振り払うように。

周囲を確認し、依田のもとへ戻る。

依田を抱き上げようとする。だが、うまくいかない。

車の走行音。

燿大は、自分がやってきた方向から車のライトが近づいてくるのを認める。

依田を車の影へ隠そうとする。

が、うまくいかない。

走行音が近くなり、ライトが道を照らす。

燿大、歯を食いしばり、最大の力を出す。

燿大の車の横に黄色のタクシーが止まる。

加藤則文（67）が声をかける。

加藤 「おうい。なんかあったかね」

加藤は窓を開けて、様子を伺っている。

燿大はボンネットに両手をつけている。

汗だくで、呼吸が荒い。

依田は車の側面に転がされている。

加藤からは見えない。

加藤 「故障なら手伝おうか」

燿大 「（どもりながら）大丈夫です。ちょっと鹿、鹿にね」

燿大は下を見て、ぎよっとする。

依田の手のひらが覗いている。

加藤 「そりや大変だ。どれ（シートベルトに手をかける）」

燿大は怒鳴り声で、

燿大 「大丈夫です！ J A F 呼んでるんで！」

足で依田の手をグリグリと押し込む。

加藤 「そ、そうかあ。なんか、悪かったね」

加藤の視線は道路へ。

道路に異常はなく、血痕すらない。

加藤 「鹿って……」

燿大 「（錯乱したように）あいつ、ぶつかっておきながら逃げ

たんだよ！ ああ、むかつく！ むかつく！」

加藤 「さ、災難だったね……お疲れさん」

タクシーが去っていく。ナンバープレートは「20

―20」。

燿大は大きく息を吐きだす。

トランクを開け、中にある工具を整理する。

苦勞しながら、トランクに依田を詰め込む。

4. 燿大の車・車内（夜）

燿大のスマホに着信。画面には昇利の写真。依田とのツーショットであり、依田はブランドものの鞆を持っている。

震える手で通話ボタンを押す。

燿大 「あ、昇利？ ちょうどよかった。急に用事入っちゃってさ。え？ お前もかよ——うん。また走りに行こうな」
通話を切り、車を走らせる。

5. タクシー・車内（夜）

通話を切る昇利。

昇利は後部座席におり、真貴子は助手席にいる。

真貴子 「あなたの先輩、役に立つじゃない。いつも夜中に連れ出してとか思ってたけど」

昇利 「燿大さんは……いい人なんだよ」

真貴子 「とっさに死体を隠すような人が？」

昇利はうつむいて拳を握る。

真貴子 「あんたも。カッとして殺すのはだめでしょ」

6. 山沿いの道（夜）

タクシーが麓へと向かう。

7. 山（夜）

山の中奥深く。道路脇から伸びた山岳古道の果て。

車のライトが燿大を照らしている。

燿大はマイナスインドライバーで地面を掘っている。

なかなか掘り進められず、苛立った様子。

車に戻り、トランクの中を物色する。

折り畳みノコギリを見つけた。

ノコギリを地面に突き立てる。そのまま土をかき分けるようにしながら、必死に掘る。

長い時間をかけ、60センチほどの深さまで掘る。

空は白み始めている。

トランクから依田を引きずり出す。

穴に無理矢理詰め込もうとするが入らない。
まだ掘ろうとノコギリを手にし、ハツとする。
依田とノコギリを見比べる。

8. 道路（早朝）

山の麓に位置する道路。人の気配も走行車もない。
山からの道に対し、赤色点滅信号が点灯している。
そこから少し離れた場所に小さな駐車場がある。
駐車場には加藤のタクシーが停まっている。

9. 駐車場（早朝）

砂利を敷いただけの月極駐車場。自販機がある。
タクシーから降りる真貴子。

加藤 「まだじゃないか？」

加藤が窓から顔を出す。

加藤 「すぐ降りてこないってことはさ。死体、隠してんだよ」

真貴子 「早く帰りたいのに」

山から燿大の車が下りてくる。

加藤は窓を閉め、真貴子が助手席へ戻る。

後部座席に昇利がいない。

真貴子 「待って。あの子戻ってない！」

× × ×

自販機の裏側。

昇利が膝を抱えている。

ドアを閉める音に気づき、顔を出す。

山から下りてくる燿大の車を見て、青ざめる。

10. 燿大の車・車内（早朝）

燿大の顔や手は血で汚れている。
燿大、駐車場に止まるタクシーに気づく。
ゆっくりと駐車場に近づき、ナンバーを確認する。

11. 駐車場（早朝）

燿大の車が到着する。

燿大は降りようとするが、血に気づいてやめる。

グローブボックスからウェットティッシュを取り出

し、力任せに拭く。

ミラーで顔を確認してから外へ。

タクシーの運転手側の窓を軽く叩く。」

加藤が窓を半分開ける。

加藤 「ちよつとなんですか……ああ。鹿の」

燿大 「あの、すみません。あとで保険屋に話すときに証言して

もらおうかなって……（真貴子に気が付いて）あれ、お

客さん？」

燿大は後部座席も確認する。依田の鞆が置いてある。

× × ×

スマホ画面に表示された昇利のツーショット。

死んでいる依田の顔。

× × ×

燿大は呆然と鞆を見つめている。

真貴子が怪訝そうな顔をする。

加藤 「やめてくださいよ」

燿大 「俺と同じぐらいの男か、女の子、乗せませんでした？」

加藤と真貴子が息をのむ。

サイレン音。数台のパトカーが向かってきている。

自販機の影から昇利が顔を出す。手にはスマホが握

られている。

昇利 「燿大さん、許して……」

燿大、たまらず叫びだす。昇利に向かおうとする。

すかさず加藤が捕まえる。

パトカーが到着し、警官数名が降りてくる。

警官が燿大を取り押さえる。

燿大の怒声が響く。

神妙な面持ちの加藤一家。燿大を憐れむように見つ
めている。

おわり